

日本経済統計の制度について

高 木 秀 玄^{*}

どんな統計がどの機関によって作成されており、それがどんな形式で公表されるかを知ることは、統計を利用するもの、あるいは統計の利用者のための組織にとって不可欠のことである。すなわち、データの作成者とデータのあり場所をはっきりさせることが研究者にとって無視できない条件である。

ところで、統計には官庁統計と民間統計の二つのものがある。これは、「統計」という外国語の Statistics が State = 国家に由来することより、はっきりしている。すなわち、国家はその国情を知らなければ政治も行政も出来ないからこそ、その国情を記述する統計を作成したのである。ここで私はヨーロッパや古代のエジプト、中国のことにふれることはできないが、わが国の官庁統計史をみるだけでも、統計と近代国家との関係がわかるというものである。

さて、わが国の官庁統計のはしりは明治四年の大蔵省に統計司が置かれたことである。もっともこの統計司は一月あといに「統計寮」と改められたのであるが、その後、数回にわたる改変の後に、明治十八年に内閣に統計局が置かれ、今日の官庁統計の基盤となった。その背景には学問的には杉亨二、福沢諭吉等のように大阪の緒方塾で新しい西欧の学問体系の一つとしての統計学を学んだ人々の政府に対する建白運動とともに、近代国家の運営に不可欠な統計データの作成を抜きにしては何ごともしないという自覚によるものである。なお、当時の統計学はフランス、オランダ流のものであり、その代表的なものは明治七年に出版された箕作麟祥のモロー・ド・ジョーネの『統計学』の訳書である。その第一巻の凡例の一文こそ当時の統計および統計学のいかなるものであったかを十分に示している。すこし長いがここに引用しておくことにする。

「この学原名をスタチスチックといい、その説くところは皆、算数を以て国内百般のことを表明し治国安民のため最も緊要のものたり。ゆえに上古以来いやくも開化の称ある国に於ては未だ一定の名称を下さすといえども、間々この業を修むる

^{*} たかぎしゅうげん 関西大学教授

もの多く降て紀元千七百年代に及びて初めて命ずるに此の名を以てし、碩学鴻儒相ともに討論すと雖も人なお未だその世に大益あるを知るに至らず。既にしてフランス大变革の後ちその国人等大にこの学を講明し、その業を拡充せしよりついに普く世に布及して人々皆その国を利し民に益あるを知るに至り、方今に及ては欧州各国この業を講習せざるものすくなし、然るに我国未だこの学科の書の世に翻訳の経あるものあらざるが故に今者、改めてこの書を訳し以て官梓に付すと雖もその科名に填する訳字の如きも從來あるいは政表、国勢等の字を用いて亦未だ一定普通の称あるを見ず。よってこれに改めて統計学とす。」(モロー・ド・ジョネ著、箕作麟祥訳『統計学』明治七年六月、文部省 第一巻、凡例)。

以上の箕作の凡例の中にみられる^〇政表、^〇国政と名称がそのまま、わが国の明治初期の統計官庁の名称として用いられている。例えば明治四年に太政官正院に政表課が置かれたし、当時の官庁文書にも盛んに国勢という名称がみられ、明治三年に『涉外国勢便覧』という訳書が内田正雄編で世に送られている。

明治初期より今日まで、わが国の統計調査は次の三つの系統に區別けされる。すなわち、第一は日本資本主義の発達に対応して拡充・展開されてきた経済統計の系統、第二は日本の文化的、制度的発展に伴う教育・衛生・文化・犯罪に関する、いわゆる道徳統計といわれるもの、第三は第一、第二と密接な関係のある人口統計である。(日本統計研究所、『日本統計発達史』第一章参照)。以上は統計学原論又は理論統計学に対して応用統計学といわれるものである。なお、既述のとおり統計にはその作成者あるいは調査機関の主体により官庁統計と民間統計とがあるが、わが国に限らず調査の費用、労力等の関係で圧倒的に官庁統計が主体となっている。このことは、ともすると戦争の前夜とともに統計の秘密性というかけ声で、統計は民間利用者に対して[㊤]扱いとなることは第二次大戦の時にまざまざと体験したところである。

ここでわが国の官庁統計の主たるものとその機関名を示すとつぎのとおりである。

一) 総理府本府…国勢調査、事業所統計、住宅統計、就業構造基本調査、全国消費実態調査、労働力調査、家計調査、小売物価統計、個人企業経済調査、科学技術研究調査等、二) 経済企画庁…国富調査、法人企業投資動向調査、産業連関表の作成、三) 大蔵省…税務統計、貿易統計、四) 文部省…学校基本調査、学校保健統計、学校教員統計調査、社会教育調査、五) 厚生省…厚生行政基本調査、医療施設統計、患者調査、国民健康調査、社会医療調査、薬事工業生産動態統計調査等、六) 農林水産省…農業センサス、漁業センサス、作物統計、米生産費統計、農家経済調査等、七) 通産省…工業・商業統計センサス等が挙げられる。

以上の主たる官庁統計機関についてであるが民間統計の代表的なものが日銀統計

局であり、各種の金融統計および卸売物価指数の業務に当たっている。

さらに、行政管理庁行政管理局統計主幹の各種の刊行物は、われわれ統計利用者にとって重要な手引書となっているし、国際的には ILO、O. E. C. D. および国連の統計資料がある。すなわち、統計の作業にかかわりのない中央官庁はないのである。

以上の中央官庁の統計活動に対して、地方自治体の統計は、今日のように地方自治体の活動とその成果の評価が重視される時代には、地方自治体の統計を無視することはできない。いいかえれば、地方自治体の自治行政が活発になればなるほど、その統計活動が盛んになる。たとえば昭和22年度の「東京都昼間人口調査」、27年の「北海道常住人口調査」をはじめとする各都道府県知事を作成者とする地方自治体の統計は昭和35年以来、中・小規模の市町村にまで実現され、こういう意味で「統計活動をしない役所は存在しない」といっても過言ではない。ところが、同じ官庁統計のシステムについても、時には中央集権的となり、地方自治体は単に末端の調査活動の担い手にすぎないようにとり扱われることがあるし、また、現にそのような状態がみられるものがある。たとえば、わが国の「消費者物価指数」の計算に当たってのウェイトの算出の基礎ともいうべき『家計調査』（指定統計第56号、総理府統計局）は、東京都のような大自治体でさえ、調査はするが、自分の利用目的にに応ずべく整理、分類することを許されないため、記入済みの調査票を総理府へ渡すだけである。なお、大阪府のように条例により、調査票の一部分だけを利用して、その利用に用いるところがある。地域分析という視点からいうと、ある種の統計については地方分権制度が望ましい。

以上はわが国の官庁統計制度の梗概であるが、その利用者の側からみると、それぞれの統計の定義についてよく理解しておかなければならない。たとえば「消費者物価」とは「一般の家庭で日常購入するいろいろの商品の値段、つまり小売価格やサービス料金などを総合した平均としての消費者物価のことで卸売物価ではない。」（『調査の手引』）と規定されており、したがって、毎月末に発表される「消費者物価指数」は単に消費者物価の変動だけを語るもの、あるいは物価が独りあるきするものであって、消費者、すなわち勤労生活者の「暮しむき」については全く関係のないものである。これが政府指数当局の消費者物価指数批判論者に対する言い分である。もっとくわしくいえば、消費者物価指数には地価、公租公課等の非消費支出はふくまれない。したがって、これは賃金のエスカレーションに利用すべきものではないという。ところが、人事院はこのような消費者物価指数を重要な勧告レベルの算定基準にしており、労働組合もまたそうである。そこで指数当局の言い分を入れて、これに代る「生計費指数」の計算を試みようというのが、政府統計批判論者

の主張であり、国民春闘共闘会議と東京都の「生計費指数」である。私自身も前者の算定に関係したのであるが、ここで述べたいのは官庁統計は官庁統計なるがゆえに無条件にわれわれの目的に応えてくれないことがよくある。ところが私どもの習性として「お上の統計」は絶対的なものであるという間違った考えがあるのである。私の訳書『統計でウソをつく法』（講談社、ブルーバック）の中の統計を見破る法の一つである「O・K・ネーム」による無条件降服の一種である。以上は統計利用者が常に批判の利用者でなければならないということの一つの例である。

すこしくどのようなものであるが、かつてナチスによって追放されたドイツの有名な統計学者エルンスト・ワーゲマンは『統計のダマシ鏡』という書物を執筆した。非常に面白い本であってわが国の多くの統計学者が愛読したものである。よく温泉ホテル等でみられる、映す角度によってすらりと八頭身になったり、ズングリと短軀になったりする例のダマシ鏡こそ統計のようなものである。但し統計がウソをいうのでない、ウソつきが統計を利用すると大変なことになるのである。

以上、私はわが国の統計制度を明治七年の箕作麟祥によるわが国の最初の統計学翻訳書の凡例を手がかりとしてとりあげ、今日の統計制度を概況し、絶対視されている総理府の消費者物価指数の批判を統計批判の一例としてとりあげ、今後は研究者、利用者より、どんどん政府統計を批判し、出来れば各種の機関で自分の求める統計を試算してみる必要があることを述べた。丁度、この稿を執筆した1978年9月12日の各紙朝刊は衆議員選挙の一票の重さが人口過密な千葉四区などの選挙区と最も少なかった兵庫五区との比較で、全国平均と比較して兵庫五区は大した落ち込みでないからとして東京高裁は訴えを棄却したと大見出しで報道している。ところが、どんな種類の平均なのか全くふれていない。こういう場合には「モード」によるのが常道なのだが、統計学を研究するものとして非常に気になることである。